



(医学生研究発表) 早期乳癌温存術後の温存乳房における寡分割照射の有用性の検討～寡分割照射はこれからの標準治療となり得るか～

著者名	石橋 里奈
雑誌名	東京女子医科大学女性医師・研究者支援センター女性医師支援シンポジウム2016抄録集
巻	平成28年度
ページ	11-11
発行年	2016-06-04
URL	http://doi.org/10.20780/00031983

タイトル：早期乳癌温存術後の温存乳房における寡分割照射の有用性の検討

～寡分割照射はこれからの標準治療となり得るか～

指導教員：放射線腫瘍科講座 唐澤久美子 教授

氏 名：石橋 里奈

《目的》

乳房温存療法および乳房切除術後における寡分割照射法が通常分割照射法と比較して安全性ならびに有効性の点で差がなく、利便性の点で優れていることを証明するためのアジア 11 か国の共同試験を行っている。今回は当院の登録症例での急性期有害事象に着目し評価した。

《対象》

下記の基準を全て満たす患者を対象とする。①東京女子医科大学病院放射線腫瘍科にかかっている患者 ②同意取得時点で 20 歳以上の女性 ③乳房温存術が施行され病理組織学的に乳癌であることが確定している ④原発腫瘍の広がり t_{is} 、 t_1 あるいは t_2 である ⑤腋窩リンパ節郭清術（センチネル生検を含む）が施行されリンパ節転移数が 3 個以下であることが病理組織学的に証明されている

《方法》

温存乳房照射のプロトコールに従い、通常分割照射群と寡分割照射群を比較した。高リスク因子ありの例は、患側全乳房照射後に腫瘍床への追加照射を行う。高リスク因子とは、年齢 50 歳未満、腋窩リンパ節転移陽性、リンパ管・脈管浸潤あり、断端陽性か近接をさす。通常分割照射群は全乳房 1 回 2.0Gy \times 25 回＝総線量 50.0Gy（ \pm 追加照射 2.0Gy \times 5 回＝10.0Gy）、寡分割照射群は全乳房 1 回 2.7Gy \times 16 回＝総線量 43.2Gy（ \pm 追加照射 2.7Gy \times 3 回＝8.1Gy）をそれぞれ照射した。有害事象は CTCAE v4.0 で評価した。

《結果》

通常分割照射 15 例と寡分割照射 15 例を比較した。T 病期は、通常分割照射群で T_{is} 5 例、 t_1 7 例、 t_2 3 例、寡分割照射群で T_{is} 4 例、 t_1 8 例、 t_2 3 例であった。照射期間は、通常分割照射群で 33～48 日（平均：40 日）、寡分割照射群で 22～29 日（平均 26 日）であった。急性皮膚炎の出現頻度とその経過は、通常分割照射群は照射期間中に 0 度 4 例・1 度 8 例・2 度 3 例、1 週間後までに 0 度 9 例・1 度 5 例・2 度 1 例、2 週間後以降は 0 度 12 例・1 度 2 例・2 度 1 例であった。寡分割照射群は照射期間中に 0 度 4 例・1 度 11 例・2 度 0 例、1 週間後までに 0 度 10 例・1 度 5 例・2 度 0 例、2 週間後以降は 0 度 11 例・1 度 4 例・2 度 0 例であった。

《結論》

寡分割照射においては 2 度の急性皮膚炎の出現はなかった。寡分割照射は、通常分割と比較して、現時点では、急性皮膚炎に関しては問題となる有害事象の頻度が低かった。

《考察》

寡分割照射の研究における本当のゴールは 5 年後、10 年後の長期治療効果と晩期における有害事象を考察し、その有用性を証明することである。これからも研究を重ねていく必要があるが、寡分割照射がアジア各国で標準治療になれば患者の負担をより減らすことができると期待される